

隨筆

いるし、近代ジャーナリズム史にも一項を占める。もちろん敬重はせられていないが、無視できぬ存在となった。

私は「文藝春秋」の記事が、トップ屋と同視していいか、どうかを知らぬが、少くともトップ屋傾向の、言うならば最高の形のものだ。心がけようによって、トップ屋はアメリカのマック・レーカー以上の役割を果すことになるかも知れぬ。



マゼランとラプラブ

中嶋 嶺雄

(東外大助教授)

内外ともに世相の動きはあわ



ただしく、人は夢を追い求めることも難しい昨今だが、しかし、そのようなときでも、冬の星空を都会の空気を透かして眺めるとき、人類にはまだまだ巨大な夢が残されていることを感ずる。たとえ、月や太陽系の小宇宙には、もはや秘密がないにせよ、宇宙はなお大無辺ではないか。人類はようやく月に到着したにすぎないのだから、などとしばし童心に回帰したくなるのは誰しも共通のことであろう。

十五世紀初期のマゼランの世界周航は、「初めに香辛料ありき」の言葉が示すように、ある意味では、現世的な動機が人類を大航海への冒険に誘ったとはいえ、やはり巨大な夢の探索であったがゆえに、人びとをあれほど陶酔させたのであった。今

日では、世界史の教科書を開くと、マゼランの偉業が型通りに記されていて、しかも「航海の途次、フィリピンで土人に殺された」とも書かれているのだが、マゼラン艦隊の三年間に亘る大航海が、未知なる世界への挑戦であり、大自然との壮烈なたたかいであった以上に、この航海に選ばれた人間集団内部の善と悪との、美と醜との激しいたたかいであったことは、ツヴァイクの感動的な伝記「マゼラン」(邦訳、ツヴァイク全集第十六巻、みすず書房)がよく伝えていている。周知のように、スペイン王の命によって二百六十五名から成る五隻の艦隊を連ねてセビリアを出帆したマゼラン艦隊が、ビクトリア号一隻だけになって奇跡の生還を成し上げたとき、生存者はわずか十八名

にしかすぎなかった。しかも、その偉業の瞬間においてさえ、「死んだ者が損をする」ように、マゼランの功績は横取りされようとし、生存者のなかにマゼランの忠実な部下であり、友人であった航海記録者のピガフエッタが残っていたからこそ、今日、マゼランの名は歴史に残っているのである。マゼランがポルトガル人であったことも、スペイン帝国の国民的虚栄心からして、彼の功績の横取りを可能にする条件を提供していた。

ところで、用意周到で忍耐強く優しさで人間性に富んでいたマゼランが、なぜ「フィリピンの土人に殺された」のか。それは熟練した計算家の「千慮の一失」であったのだが、だが、「フィリピンの土人に殺された」という表現は、そのまま受

け容れてよいものかどうか。私は、去る九月、マゼランが殺された、セブ (Cebu) の対岸のマクタン島 (Mactan Island) の海辺を訪れて、やはり感慨新たなものがあつた。

スペイン統治時代のフィリピンの古都セブは、東南アジアではマカオ、マラッカといったポルトガルのかつての拠点と並んで古い歴史の白緒に彩られた町であり、フィリピンのキリスト教洗礼地であるだけに、フィリピン最古のサン・オーガストン教会には、その日もフィリピン人、中国人が一心に祈りを捧げていた。セブは、私にとつて、フィリピンを訪れるたびに果たそうとして果たすことのできなかつた憧れの地でもあつたが、レイテ島の西に位置するセブへは、マニラから国内航空の

ジェット機で一時間少々で到着できる。その飛行場がすでにセブの港を隔てた珊瑚礁の小島マクタン島に位置しており、マクタン島こそ、マゼランの没した島である。対面にセブ島の山並みを望み、遠浅の海が続く白砂の浜辺には、南海の炎天下、女子供が小魚を網で無心に拘っている。たまたま妻と長男を同伴した私以外に誰もいないこの地点こそ、マゼランが一五二一年四月二十七日にマクタンの「土人」たちに殺された地点であり、そこにはマゼラン記念碑があつて、その背後にはマクタンの酋長ラブラブ (Lapulapu) がマゼランらと一戦を交えたときの模様がペンキ絵で描かれている。そして、この記念碑には、マゼランの故事とともに、「ラブラブ。一五二一年四月二十七

日、ここにラブラブとその部下は、スペインの侵入者たち (Kastiles) を撃退し、その指揮官・フェルディナンド・マゼランを殺した。かくて、ラブラブはヨーロッパ人の侵略をはねつけた最初のフィリピン人になった」と銅版が刻まれていた。こうしてマゼランも、マクタン島では侵略者であり、ラブラブこそ英雄としてそれを称える碑がマクタンの町の中心部に建てられていた。

ピガフェッタの記述に基づくとツヴァイクの伝記によると、セブ上陸に大成功したマゼランは、スペインの威信のためにこそ、あえて大量の重砲を用いることなく、わずかな手勢で、このセブの鼻先の小島を従えようとしたのだが、この海が遠浅の珊瑚礁であることを計算できず、

船やボートを横づけできないまま重い甲冑をつけて海水を徒渉することをよぎなくされたのであり、かくして文明の先駆者、世界の征服者も、このようなたかひでは「土人」たちに勝てなかつたのである。こうして、「史上最大の航海者は、理想を実現した最高の、そしてもっともすばらしい瞬間に、裸の島民の一群とけちな小ぜりあいを演じて無意味な死をとげた」(ツヴァイク)のであつた。

私が訪れたとき、マクタン島の空はどこまでも碧く、高い椰子の樹の根元には、ヤドカリが群がっていた。帰りの空港で時間待ちのあいだに、高校生らしい女の子に、マゼランはいまでも侵略者だと思われているのか、とたずねてみたら、彼女は「セブを有名にした英雄だと思

う」と屈託なく笑つて答えてくれた。



喫茶店

吉村公三郎

(映画監督)

近頃コーヒーだけを飲ませるコーヒー専門店という喫茶店が増えて来た。その多くが茶色の板を壁面にはりつけ、中にはシヤンデリヤもぶら下げた英国風(?)のクラシック・スタイルで、モカ、ブラジル、コロンビア等々産地ごとにかけて、コーヒー豆が飾ってある。何んとなく香りと味を楽しむのに効果的な雰囲気を出し、気分を落ち

つかせようとの趣向らしい。

むかしからそうだ。若い頃からコーヒーが好きで、かれこれ四十年以上も飲んでゐるのに、さっぱりコーヒー通にもならない私だが、こういう店のつくりだとそう不味くないことはカンでわかる。それにしても随分たかくなつたものだ。一杯百八十円なら安い方で、大ていは二百円、三百円、五百円というのもの珍しくない。豆も値上がりしたのだから、スーパ―あたりで買って二百グラム三百八十円だから、ずい分ポツていることになる。

コーヒーは薬じゃないし、飲まなくても済むのだから少々高くつても構わないわけだが、それにしても高すぎる。思うに働いてゐる人達の給料があまり、夏冬の冷暖房、店の飾りつけの

費用がかさむからのことだろう。客はこういうものに半分以上の金をとられてゐる。

だがどの店も可成りはやつてゐる。主に客は若いサラリーマンや学生達だが、インフレのこの世の中に、昼食代を切りつめてもコーヒーを飲みに集まる。さる哲学者がいみじくも言つた如く、まさに日本の文化は全部が輸入品だという意味も含めて、全くのコーヒー文化だ。ところでこういうコーヒー文化はいつ頃から始まつたのだろう。さる物の本に依ると、店を構えてコーヒーを飲ませたのは、明治二十一年の四月六日、鄭永慶という多分華僑の一人が、東京の下谷西黒門町に可否茶館というのを開店したのに始まるという。その時のコーヒー一杯のねだんは一銭五厘で、牛乳一杯よ

り五厘安かつた。メーンゾン薄ノ巢というのが明治四十一年に日本橋小網町に出来たそうだが、有名になつたのは明治四十四年に京橋日吉町に開店したカフェー・プランタンである。

主人は画家の松山省三さんで、今テレビ・タレントで知られる松山英太郎、省二君等のおじいさん、つまり前進座の河原崎国太郎さんの父君である。このカフェー・プランタンが銀座の千疋屋の向かいあたりにあつたのを私も知っている。壁に沢山画をかけてある矢張り古風なつくりの店で、主人が画かきさんだとの話はこのとききいた。だがここはコーヒーも飲ませるが、ちよつとした食事もあるし、酒もある。今でいうならスナック・バーでもあるうか。

撮影所へ入つて三年後、兵隊